

日英両語音声の比較

赤坂和雄

1. 日英両語比較研究の目的

1.1. 日英両語比較研究の目的は、音声面の研究、構造上の研究、外来語との関係の研究（借用語の研究）、二重言語者（bilingualist）の研究等があるが、最も有効と考えられるものに外国語としての英語教育への適用というものがある。従来の英語教育といえども勿論数々の問題はあったが、教授法そのものだけに研究の重きがおかれ、母国語である日本語との Contrastive study が軽視されがちだったように思われる。かかる観点から、日英両語の Contrastive study がより明確にされる種々の面、即ち、音声上の比較、構造上の比較等々が外国語学習上の困難点を速やかに予知し理論的解釈で理解を助け学習指導の効果を高めていく事が出来るだろうというのがこの小論の目的である。

1.2. 音声学上の比較には方言の問題があるがここでは、英語の場合最も acceptable な方言、即ちイギリスでは London を中心とした南部方言で、アメリカの場合は普通中西部型、南部型・東部型に分類されるが、ここでは最も通用範囲の広い中西部型（Middle Western speech）を一応基準にして考えて行きたい。日本語の場合我々のよく知っている東京の標準語（「ヒ」と「シ」の区別のあるもの）を念頭において考察する。

2. 比較記述の順序

-
- 1) 松浪有, 日英語文法の比較の可能性, 現代英語教育 July 1968 p. 2
 - 2) Daniel Jones が基本とした pronunciation
 - 3) 別名 General American speech (一般型)

比較記述の問題をとり上げれば、かなり多くの問題点が考えられるが、ここでは一応次の諸点について考察して行くことにする。

1. 音節構造の問題
2. 発音の問題
3. 表記と発音相違の問題

3. 音節構造の問題

3.1. 我々日本人が外国語を音^{オン}にするとき、或いは外国人が日本語を音にするとき、それが如何にも外国人なまりの発音で、明らかにその人はその語の native speaker ではないということがわかる場合、それはその言語の音節構造・アクセント・イントネーション・リズム等々が自国語のそれとは違うという言語習慣を知らないで話すからである。つまり新しい国語を学ぶときは、語いを拡大して、流暢になろうとあわせってはいけないのである。限られた表現範囲内での音、リズム、音調、構造上の形態、配列などの正確さがまず第一で、学生がその主な関心を語い拡大に向けてよいようになる前にこれらが自動的習慣になっておらねばならない。⁴⁾ しかも、まず音組織を習得すること—談話の流れ (stream of speech) を理解し、音の示差的特徴 (distinctive sound features) を聞き分け、自分の発音をそれに近づけること—である。⁵⁾

Dr. Fries も述べているように stream of speech を速やかに理解し、自分の発音を彼らのそれに近づいた発音が出来ようになることが大切なのである。このような観点から日本語の音節と英語の音節がどのような仕組で、どんなところに相違があるのかを知ることは極めて重要なことであると思う。

3.2. 音節を考える前に日本語の音素 (phoneme) とその体系を考察する。⁶⁾

(1) 子音音素 (Consonant phonemes)

喉音 /h'/、鼻音 /m,n,ŋ/, 流音 /r/, 破裂音 /p,t,k; b,d,g/, きしみ音 /c,s,z/
これらの子音の一部は無声対有声音の弁別的特徴で次のような対立をしている。

4) Charls C. Fries, Teaching and Learning as a Foreign English 太田朗氏訳 p. 6

5) Ibid., p. 5

6) 服部四郎, 言語学の方法 p. 360

無声音 /h; p,t,k; c,s/

有声音 /ʔ; b,d,g; z/

(2) 半母音音素 (semivowel phonemes)

/j,w/

(3) 母音音素 (vowel phonemes)

/i,e,a,o,u/

(4) モーラ音素 (mora phonemes)

/N/ (はねる音), /Q/ (つまる音)

3.3. 音節 (Syllable) は上記の諸音素と一定の規則に従って結合し単語の「形」(単語の音の社会習慣的特徴) が形成される。日本語の音節構造は次のようになる。⁷⁾

/CV/, /CVV/, /CV_N/, /CV_Q/, /CSVV/, /CSV_N/, /CSV_Q/ ⁸⁾

3.4. 日本語音の基本構造は /CV/ で, open syllable である。⁹⁾ /N/, /Q/ を除くと実に平易な音組織になってしまう。しかしここで問題となる点は /VV/ の音節構造である。何故ならば, /VV/ には3つの音構造があるからである。いま /VV/ の構造を次のように分類する。

(1) 長母音 (Long vowel) の場合,

(2) 同母音であっても, 母音と母音の間に短い pause がある場合,

(3) 異母音の場合

/VV/ の音節構造は上記の如く3つの場合に分かれる。しかしこのままでは /VV/ の音節が (1), (2), (3) のいずれであるかを表記できない。どのように異なっているのかを考察してみよう

(1) Long vowel の場合,

「空気」「姪」「塔」などは完全に long vowel のもった構造と考えてよい。ひ

7) Ibid

8) /C/ は子音音素, /V/ は母音音素, /N/ は「はねる音」, /Q/ は「つまる音」

9) 日本語やフランス語, いわゆるロマンス語には open syllable が多く, ゲルマン系語族 (英語, ドイツ語等) は close syllable が多い。

尚, 太田氏は現代英語教育講座 7 p. 20 に次のようなことを述べておられる。

「/ɲ,ŋ/ を除いて, 日本語の音節はすべて開音節であり, 英語の典型的な音節は cvc という閉音節であるから, 日本人にとって尾子音 (Final consonant) は苦手であって, 尾子音のおとに余分な母音を入れて発音しがちになり, また閉鎖音の破裂されない異音が尾子音として用いられるときは, その聴取が容易でない。」

らがなで「くうき」「めい」「とう」と表記されていても実際には「くーき」「めー」「とー」のように直前の母音を伸ばすことによって発音されている。しかるにここでは音節構造をはっきり表記出来なければならない。アクセントの関係上、/kuuki/, /mee/, /too/ と表記し long vowel を phoneme の連続とみる。

(2) 母音と母音の間に短い pause がある場合 /kataasi/, /kootoko/

子音音素に /ʔ/ が喉音として認められているので /VʔV/ の構造を考え、/ka-taʔasi/, /koʔotoko/ とするのが妥当と思われる。

(3) 異母音の場合

2つの場合がある。日本語（漢字）が1字と2字の場合である。

[ʔkaʔi] (貝)

[kaʔi] (甲斐)

服部博士¹⁰⁾は [ʔkaʔi] の場合を2重母音を以て1音節に発音されるが、[kaʔi] の場合は母音連続を以て発音されることが少なくないから、これらを /kaʔi/ (貝), /kai/ (甲斐)

と認められておるが筆者自身もこれは妥当であると考ええる。

尚、国広氏は前記(1), (2)の点について次のような解釈をされておられる。

- 1) { [tsʷraate] 「面当て」 /curaʔate/
[ka : ten] 「カーテン」 /kahten/
- 2) { [ii] 「唯々」 /ʔiʔi/
[i :] 「いい」 /ʔih/
- 3) { [dzokʷʷke] 「俗受け」 /zokuʔuke/
[kʷ : ki] 「空気」 /kuhki/
[kooni] 「小鬼」 /koʔoni/
[ko : ni] 「高2」 /koHni/

各対の上側の [aa] [ii] などでは間に強さの谷があり、声帯のきしりが感じられる。これは弱い有声の [h], すなわち **[ɦ]** であり、この有無によって語が弁別されるので1個の音素 /ʔ/ と解釈される。一方各対の下側の [a :] [i :] などでは間に強さの谷がない。この [:] に該当する部分は母音性が共通であると同時に、もう1つ他の音をはさまずに前の母音に、しかも緊密につながっている共通点がある。¹¹⁾

10) 服部四郎, 音韻論と正書法 p. 155

11) 国広哲弥, 日英両語の比較研究 p. 30

3.5. /N/ 音は英語音には見られないもので解釈が困難であり又異音の多い音である。このモーラ音素を3つに分類して考察してみる。

① /N/ が語尾に来る場合

- A) /baiteN/ (売店)
- B) /tokuseN/ (特選)
- C) /nihoN/ (日本)

② /N/ が語中にある場合

- A) /kaN'ON/ (漢音)
- B) /keN'aN/ (懸案)
- C) /seN'eN/ (千円)

③ /N/ のすぐあとに子音が来る場合

- A) /kaN'taN/ (簡単)
- B) /seN'ri/ (千里)
- C) /teN'rikjoo/ (天理教)

①の場合は /N/ が母音音素のすぐあとについていた例ではあるが、注意深く発音、観察すると /N/ が時によっては /n/ と発音される場合がある。すなわち舌端が上の歯茎に軽く接して英語音の [n] で発音しているのである。②の場合の2つの N が正確に /N/ と発音されていて問題はない。しかし /kaN'ON/ (漢音) の場合はこれでよいのではあるが、こういう例もある。(観音) である。これは②の例には当てはまらないものである。/kan'noN/ という構造をもっている。

③の場合は実際には前述の如くは発音されない。

- A) /kan'taN/
- B) /sen'ri/
- C) /ten'rikjoo/

と発音表記すべきであろう。これは次に来る子音のために /n/ 化するのである。

3.6. 日本語モーラ表

/a 'i 'u 'e 'o 'ja 'ju 'jo 'wa/

/ka ki ku ke ko kja kju kjo/

/ga gi gu ge go gja gju gjo/

/ya yj yu ye yo/

/sa si su se so/
 /za zi zu ze zo/
 /ta te to/
 / ci cu cja cju cjo/
 /na ni nu ne no nja nju njo/
 /ma mi mu mo mja mju mjo/
 /pa pi pu pe po pja pju pjo/
 /ba bi bu be bo bja bju bjo/
 /ra ri ru re ro rja rju rjo/
 /N Q/

3.7. 英語の音節

英語の音節は、或る規則をもった日本語のそれとは非常に異なる。母音と子音のつながり方が数学的ではない。いわゆる /CV/ の型は英語にはほとんどない。子音と子音の結合が多いのである。すなわち /CC-/、/CCC-/、/-CCC/,、/-CCCC/,、/-CCCCC/ のような子音の連続なのである。日本人のように /C/ の次に /V/ がくるといふ言語習慣を持っている我々には、語尾に /-V/ をつけて発音したくなるのが人情である。しかし乍ら、英語を発音する時は英語の言語習慣に慣れ、なまりのない発音を身につけなければならないのである。そのたのにはこの音節構造しくみを明らかにしなければならない。

3.7.1. 英語音節の基本構造は 3.7 ですでに述べた通りであるが、試みにどんな単語があるのか例を上げて考察してみよう。

1) /CC-/

stone, pretty

2) /CCC-/

strike straight

3) /-CC/

pianist, middle

4) /-CCC/

sprinkl, asked, nests

5) /-CCCC/

exclaim, extraordinary

6) /-CCCCC/

strengths

このように英語には日本人にとっては全く見慣れない、聞き慣れない子音だけの連続が可能なのである。

3.7.2. 英語は子音だけの連続が可能であるというわけではない。母音の連続（2重母音：diphthong）もあるのである。例えば、

/CVV/, /CVVC/, /CVVCV/, /CVVCC/

等々の如く母音の連続も多い。これらは diphthong であって決して long vowel ではない。次がその例である。¹²⁾

boy [bɔi] /CVV/boat [bɔt] /CVVC/motor [mɔtə] /CVVCV/table [teibl] /CVVCC/

しかしながら日本人は日本語の言語習慣のため [ɔi], [ɔu], [ei] 等を理屈のうえでは認めていても、余程注意し、且つ練習をしなければなかなか正しい発音ができないという問題がある。

3.7.3. 音節の区切り

日本語では /C/ と /V/ の間に音節の区切りがあるのが普通であるが、英語の場合はそうではない。

A) shutter [ʃʌtə]

B) apron [eɪprən]

¹⁴⁾ 国広氏が述べておられるように、/-VC-/ において日本語では「つなぎ」がゆるいのに対して英語では固いという相違がある。言い換えれば日本語では /V/ と /C/ の間に強さの谷がくるのに対して英語ではそれが無い。しかるに、A) の場合は /t/ の内部に音節の区切りがあり、B) の場合は /C/ と /C/ の間に音節の

12) ここで敢えて diphthong /VV/ が long vowel でないという理由は、日本人の場合これらの単語を「ボーイ」、「モーター」、「テーブル」のようにいずれをも long vowel のように発音してしまうからである。

14) 国広哲弥, Structural Semantics p. 176

区切りがある。

しかし乍ら、日本人は /Q/ の言語習慣をもっているので shutter [ʃʌtə] を、
/sjaQtaR/「シャッター」

のように発音してしまう。従って英米人が発音する場合と日本人が発音する場合とでは /Q/ だけ長さが変わってしまう。すなわち、[ʃʌtə] を1拍 (a clap) とすると [ʃattai] は1拍半 (a clap and a half) の長さになり半拍 (half of a clap) だけ日本人の発音が長くなる。¹⁵⁾

このような観点から日本人も英米人も共に自国語の音節構造の習慣を出してしまうので互いに「外国人なまり」の発音になってしまうのである。

3.7.4. 音節構造の異なる事により発音（学習）を最も困難にしているものに英語の歌がある。試みに次の両曲を考察してみよう。

(A) Japanese song

16)

ゆうやけ こやけ - の あ か と ん ぼ
yu'u ya ke koya ke 'e no a ka to n bo

おわれて みたの - は - い つ の - ひ - か
o ware te mita no'owa'a i tu no'o hi 'i ka

(B) English song

17)

Lon-don bridge is fall-ing down fall-ing down fall-ing down

Lon-don bridge is fall-ing down My fair la - dy

(A) (B) の曲に共通していえることは (A) の Japanese song にしても (B) の English song にしても、1 音符に1 音節が対応していることである。Japanese song の場合は /CV/ という規則正しい音節構造が ♪♪♪♪ にそれぞれ対応している。

15) 国広氏はこの場合 /Q/ の長さを1拍と数えておられるが、筆者は半拍の長さしか認められない。

16) 三木露風作詞，山田耕作作曲，「赤とんぼ」たのしい子供の楽譜集 p. 14

17) English Nursery Rhyme, London Bridge 英語教育叢書，大修館 p. 1

しかも「伸ばす」事を意味している「一」のところは直前の母音が /e/, /o/ /a/ の音で発音されていて決して伸ばしていることではないことがわかる。即ち ke no wa の後は e o a の長母音 (long vowel) ではなく、構造的には /e/ /o/ /a/ ということになる。この点では服部博士が「音韻論と正書法」でも述べておられる通り、「[:]」で表わした部分は、夫々別の音声母音であって、共通点としては、それが母音であるという事以外にはない。¹⁸⁾ に当てはまるものであるが、筆者がここで述べようとしていることは、日本語の歌の「一」([:]) の部分はその直前の母音を「伸ばす」ことであると一般的に考えられていることが、実際には伸ばしているのではないということである。

一方 English song をみると、やはり 1 音符に 1 音節が対応していることは日本語の場合と同じである。f : Lon, f : don, f : bridge, f : is, f : fall, f : ing, f : down……………

というように、日本語の規則正しい音節に比較するとやや複雑な感じを与えている。日本の歌手が英語の歌を歌っているのに英米人には何を歌っているのかわからないという皮肉めいた事を言われたりするのには、日英両語の音節の相違が大で、上手に発音して歌えないためである。このような点からも、日英両語の音節構造を知る事が重要となってくる。

4. 発音の問題と比較

4.1. 英語は England をはじめ Canada, Australia, New Zealand で話され、又その他多くの国々で第 2 言語として話されている言語である。Paul Roberts は興味あることを次のように述べている。¹⁹⁾

An interesting thing is that among all these speakers of English there are no two people who speak it exactly alike. We have all noticed how we can recognize our friends' voices on the telephone, even before they tell us who is speaking. Obviously, if everyone spoke alike, we couldn't do this. Voices are like finger-prints. Some fingerprints are very much like others, but each one has some special loops and whorls. In the same way, Some voices are very similar, but each one has its special personality.

18) 服部四郎, 音韻論と正書法 p. 156

19) Paul Roberts, Patterns of English p. 1

1つの言語を完全に2人として同じように話す人はいないのであるから、正確な発音を習得するということはどんなことなのであろうか。これは途方もない大きな問題である。しかし我々はもうすでに社会生活をなし、正しい言語習慣を身につけ他の人達と十分に Communication を持っているのである。すなわち社会一般に正しい、正確だと考えられている言語習慣（話し方、発音）をもって生活しているのである。我々人間社会は総合的にみて、色々な観点から、正しい言語習慣を正確な発音、すなわち標準語とよんでいるのである。²⁰⁾しかるに外国語の正確な発音を習得し、異なった言語習慣を新たに習得していくことは大変な労力の必要とする仕事である。彼らの言語習慣を「見」「聞いて」自分の発音を彼らのそれに近づけることが第1の大きな仕事である。²¹⁾その意味でも口英両語発音比較研究は大きな役割を果してくれる。

4.2. ここでは音素論学的面というよりは音声学的面から観察し、問題と考えられる点だけを取り上げ考察してみる。又一般的に試みられている母音と子音を区別した方法とはとらない。²²⁾Consonants Vowels Classification は H. A. Gleason のものをとる。

		Bilabial	Labiodental	Dental	Alveolar	Alveopalatal	Velar	Glottal
Stops	voiceless	p			t		k	
	voiced	b			d		g	
Affricates	voiceless					č		
	voiced					ǰ		
Fricatives	slit							
	voiceless		f	θ				
	voiced		v	ð				h
	groove							
	voiceless				s	š		
	voiced				z	ž		
Lateral	voiced				l			
Nasals	voiced	m			n		ŋ	
Semivowels	voiced	w			r	y		

20) 要するに総合的判断で、人間同志でとり決めた単なる約束である。従ってこの標準語とはかなり異なる話し方をしている、それは間違った話し方、発音であるとはいえない。しかし如何なる地域の人と話しても十分、しかも迅速に communication を持てるためには共通語になるべき標準語を身につけた方がよい事は当然の事である。

21) C.C. Fries. Teaching and Learning English as a Foreign Language p. 3

22) H. A. Gleason, An Introduction to Descriptive Linguistics, 1964, p. 24 and p. 35

English vowel

	FRONT	CENTRAL	BACK
HIGH	i	ɪ	u
MID	e	ə	o
LOW	æ	a	ɔ

JAPANESE VOWELS

i	u	o
e	a	

4.3. 語尾音の比較

3の章でも述べた通り、Jは open syllable²³⁾が多く、Eは closed syllable²³⁾が多い事は、日本人が英語を、英米人が日本語を学ぶ事を非常に難しくしている。open syllableの言語習慣を持つ日本人は consonant で終わる発音が困難である。日本人は（語尾音だけでなく）consonant vowel をつけて発音してしまう習慣を持っているのである。

- a. stand [stænd]²⁴⁾ /stænd/ /sutando/
- b. veil [veil] /veil/ /beeru/
- c. tennis [tenis] /tenis/ /tenisu/
- d. cat [kæt] /kæt/ /kjaQto/
- e. book [buk] /buk/ /buQku/
- f. pump [pʌmp] /pəmp /poMpu/
- g. time [taim] /taim/ /taimu/

日本語の場合共通していえる事は語尾の Consonant に vowel がついているということである。a. の E//s/ の次に J//u/ がついているのも語尾音の場合と同じ習慣からである。b. の E//l/ が J//ru/ で対応しているのは後で述べる。d. の J/to/ の前に /Q/ がついたのは、日本語には促音という習慣があるためで、次の

23) Jは JAPANESE, Eは ENGLISH を表わす。

24) この発音記号は J.S. Kenyon and T.A. Knott の Pronouncing Dictionary of American English と Daniel Jones の English Pronouncing Dictionary, 1960 による。

ような environment の場合に現われる。

fat, sit, set, but, tot

しかし E/t で終わる場合のみが促音になるのではなく, e. の book や stick などのように他の音にも現われる。

尚, E//k/ には J//ku/ が対応するのが普通なのであるが次のように J//ki/ が対応する場合がある。

ink [ɪŋk] /ɪŋk/ インキ /inki/

この他語尾音が vowel である場合もある。

sofa [sɔwfa] /sɔwfa/ ソファー /sohwaa/

butter [bʌtə] /bətə/ バター /bataa/

E//ə/ は非常に弱く, 日本人の初学者にはよく聞きとれず, 日本語の何に対応させてよいかわからない程困難な sound である。いつしかあいまいに発音されている E//ə/ が J//a/ に対応させてしまった例である。

語尾音で次に考えられる困難点の例は E/l である。これは E/r と並んで困難な発音の 1 つである。E/[l] について Gleason は次のように述べている。

In /l/ the mouth is closed at the mid-line by the contact of the tip of the tongue against the gums. There is an opening at one or both sides. It is called a lateral resonant, or merely a lateral²⁵⁾

tail [teɪl] /teɪl/ テール /teeru/

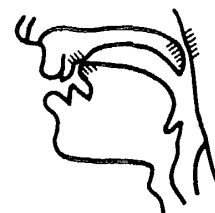
ball [bɔ:l] /bɔ:l/ ボール /booru/

日本語音には E//l/ がないので J//nu/ に対応させてしまう。だからどう発音しても日本人の発音は E の native speaker に理解してもらえない事が多い。

その他, E/²⁶⁾n が語尾になる場合がある。

25) Gleason, An Introduction To Descriptive Linguistics, 1967, p. 21

26) E/[n] を教授する際, 下図のように上の歯茎に舌端をつけて日本語の ン を発音するようにさせると正しい alveolar nasal sounds が出る。



Alveolar nasal
/n/

- /ue, uo/ 2
4. /e/ を語頭にした場合
³⁰⁾ /ei, ³¹⁾ eo/ 2
5. /o/ を語頭にした場合
 /oi, ou, oe/ 3

上の図表からわかることは、次の6つの Combination は日本語音では考えられないことになる。

/ia, ua, ui, ea, eu, oa/

又どの vowel から始まる語が1番多いのかなどということも推察出来る。capital letter が /a/, /o/ の順で多く現われ。残りの /i/, /u/, /e/ の比率は同じである。³²⁾

4.4.3. それでは英語音の場合はどうであろうか。特殊な場合もあるが列挙してみる。

/ai, au, əw, æw³³⁾, ei, εə, ou, ow, ɔə, we, wεə, wi/

この中には方言音も混じっているので実際には余り使われていない音もある。それでは今 J と E を対応させてみよう。

J/ai — E/ai	J/eo — ×
J/au — E/au	× — E/εə
J/ae — ×	J/oi — E/ɔi
J/ao $\begin{cases} \text{E/əw} \\ \text{E/æw} \end{cases}$	J/ou $\begin{cases} \text{E/ou} \\ \text{E/ow} \end{cases}$
J/iu — ×	J/oe — ×
J/ ³⁴⁾ ie — ×	× — E/ɔə
J/ue — E/we	× — E/wεə
J/uo — ×	× — E/wi
J/ei — E/ei	

30) J //ei/ の発音は全くこの通りにはされていない。すなわち long vowel にしてしま習慣がある。

31) 1つの単語としてではなく、文と文をつなぐ時に現われる型。

32) capital letter が何んで始まるのが一番かという頻度数調査は今後の研究にまわしたい。

33) Gleason. An Introduction to Descriptive Linguistics 1961 p. 31

34) J/ie は図表からもわかる通り、E にはない音である。数10人のアメリカ人に「いいえ」の発音をさせてみたが、完全に出来るのはほとんどいない状態だった。

diphthong の数は、J は13、E は12であるが、互いに対応するものあり、又対応しないものもある。つまり J 音にあって E 音にないもの、E 音にあって J 音にない例があるのである。

4.4.4. English diphthong で最も間違っ発音されている例に次のようなものがある。

boat [bout] /bout/ ボート /booto/
coat [kout] /kout/ コート /kooto/
table [teibl] /teibl/ テーブル /teeburu/

E//ou/ が J//oo/, E//ei/ が J//ee/ に対応する。これは日本人は E//ou/ を J//oo/, E//ei/ が J//ee/ と発音する言語習慣をもっているためである。

4.4.5. この他 E//ow/ が J//o/ に対応する場合もある。

bolt /bowlt/ ボルト /boruto/
post /powst/ ポスト /posuto/

これらは完全に綴字による影響と考えてよい。しかもこの場合は diphthong でなくなっている点の特徴である。

4.4.6. E/[au] が J/[wa] に対応する例

tower /tauə/ タワー /tawaa/
hour /auə/ アワー /awaa/

4.4.7. E/[f], E/[v] との比較

E/[f] も E/[v] も J 音にはない困難なものの1つである。

face [feis] /feis/ フェース /hueesu/
full [ful] /ful/ フル /huru/
Venice [venis] /venis/ ベニス /benisu/
victor [viktəi] /viktə/ ビクター /bikutaa/

J/[h] は E/[f] と E/[h] に対応し、J/[b] は E [v], E/[b]に対応している。

4.4.8. E/[θ] と J/[s/], E/[ð] と J/[z]の比較

E/[θ] は舌端を upper teeth の内側につけ、その間から息をもらして、強い fricative³⁵⁾を出す。歯の先が調音点である。これを voiceless fricative という。E/[ð]

35) 小栗敬三, English Phonetics 1953. p. 89

の調音構造は前者と同じであるがこれは voiced fricative である。これらは日本語音にはない音で、それぞれ J/[s], J/[z] が対応している。

thick [θik]	スイック [suiθku]
think [θiŋk]	スインク [suiNku]
month [mʌnθ]	マンス [maNsu]
this [ðis]	ジ ス [zisu]
they [ðei]	ゼ イ [zei]

4.4.9. E//si/ が J//si/に対応する場合

E//si/ が J//si/ に対応することは大変興味深い。何故なら native speaker は我々日本人にも聴取出来るくらいはっきりと発音しているにも拘らず、日本人は /si/ と発音してしまうからである。

seal [sɪ:l]	/siil/	シール	/siilu/
season [sɪ:zn]	/siizn/	シーズ	/siizuN/
seat [sɪ:t]	/siit/	シート	/siito/

E/[sii] は日本人にとって難しい音ではない。J 音にもこれと似た言語習慣を持っているからである。例えば /su'i ka/, /sumoo/ の場合 /u/ が脱落して, [s'ika], [s'moo] の如く発音する言語習慣を持っている。従って日本人は /u/ を unknow-³⁶⁾ingly に落して発音していることになる。

4.4.10. Long Vowel

Long vowel に関しては特記すべき事は余りないが、J 音の long vowel は E 音よりはるかに強調される点が特徴である。

soda, runner, tailor 等に見られるように、語尾が /ə/ の如く /vowel/ であるり場合、E 音がたとえ弱くても J 音に置換されると /ə/ の部分は強く、しかもよ長く発音されてしまう。

soda の場合、E/[soudə] となり E/[ou] が J/[oo] のように引っぱられる関係から後の E/[də] がこころもち伸ばされて発音されたのが何時の間にか強調され、しかも long vowel になったと考える。

runner も同じように phonetic symbol も phonemic symbol も [rʌnə], /rənə/

36) 日本人には上記の様な言語習慣を持っているのであるから、practice さえ正しい方法で行なえば E//si/ は容易に発音出来るようになる事は疑いない。又数年前 'Ben Casy' というテレビ番組があり丁ど「ベン・ケーシー」と書かれてあった。しかし、この theme が画面に現われると [ben keisi] という声が入っていた。

で、「ラナ」となってもよさそうなものだが、E 表記と J 音との関係から /rə/ と /nə/ の間に /N/ が入ってしまい、/ə/ が明瞭に発音され自然に J/aa/ の形になったものと考えられる。これはすでに 3 章でも述べた通り、J の音節構造が /CV-CV/ であり、一様の長さ・強さで発音されるからだと考えるのが正当と思われる。

open syllable の少ない E が vowel で終わると日本人は stress の持つ syllable の次にくる syllable の弱い vowel や流音は自然に引き伸ばされてしまうのである。

いっぽう J. Youn と K. Nakajima が

Long vowels are often neglected by foreigners, but they are important, because some Japanese words are distinguished by the length of the vowel.³⁷⁾

と指摘しているように日本人には非常に重要であり、しかも vowel の長さの差には敏感なのである。³⁸⁾ 例えば、

/ozisaN/ : /ozisaN/i

/seto/ : /seeto/

/obasaN/ : /obaasaN/

上の表からもわかる通り、我々日本人は、single vowel か long vowel かではっきりとした意味関係を持っているのである。

5. 表記と発音相違の問題

5.1. 表記と発音の問題は 4 章で述べてきたことから種々察知出来る。学習者にとって、第 1 次的である筈の言語行動、言語活動が若しかすると第 2 次的である知識言語、言語材料が先行する場合が多い。勿論これらの関係は両者共に重要なことであるのだが、このため言語習得、言語指導の道が誤ることは許されない。

その人にとっては外国語である言語音を、耳を通し、又目を通し習得していくのが理想なのであるが、我々はここで、その外国語音を目で納得するためには自国語に置換されたものが必要となってくる。しかしその表音文字（自国語に置換された phoneme）が発音された時、その外国語音と同一であらねばならない。もっと柔軟な言い方をすれば、誰が耳にしても、その外国語はそれであるか、或はそれに近い

37) J. Young & K. Nakajima ; Learn Japanese : Pattern Approach Vol.1 p. 3

38) 太田朗, 現代英語教育講座 7 p. 35

音でなければならない。「正書法としてのローマ字綴りと音韻記号とが一致するの
 が理想である」³⁹⁾と服部博士も述べておられるように、そうするためにはその外国語
 音と全く同じか、或はそれに近い音韻記号を作り出さなければならない。しかし乍
 ら現在迄の Romazination ではこれらの問題を解決してくれていない。しかるに筆
 者は上記の理由で現在の Romazination の問題を提起し、如何なる点を改良しなけ
 ればならぬかを検討してみたい。

5.2. Vowels の問題

J には 5/a, i, u, e, ɔ/, E には 9 /a, ʌ, æ, i, ɪ, u, e, o, ɔ/ の vowels があり, J
 の 5, E の 9 で, この点からも, すでに問題が出来ているわけである。4 章でも
 述べた通り, この 5 つの vowel で 9 つの vowel に対応させているのである。この
 事自体もうすでに無理が生じている。

5.3. 更に悪いことは, E/a, e, i, o, u の phonemic problem である。即ちこ
 れら 5 つの symbols は個々にそれぞれ幾つかずつの音声的表記を持っている。

$$\begin{array}{lcl}
 a & \left\{ \begin{array}{l} /ei/ \\ /a/ \\ /æ/ \end{array} \right. & i & \left\{ \begin{array}{l} /ai/ \\ /i/ \\ /ɪ/ \end{array} \right. \\
 e & \left\{ \begin{array}{l} /e/ \\ /i/ \\ /i:/ \\ /silence/ \end{array} \right. & o & \left\{ \begin{array}{l} /ou/ \\ /ɔ/ \\ /o/ \\ /ə/ \end{array} \right. \\
 u & \left\{ \begin{array}{l} /u/ \\ /ə/ \\ /ju:/ \end{array} \right. & &
 \end{array}$$

の如く E の a, e, i, o, u には全部で 16 通りの phonemes がある。これだけを
 考察しただけでも E の difficulties が理解できる。

5.4. 逆に E 国民の立場から J 考察をしてみると, 彼らは 5 つのみしかない J
 の a, i, u, e, o の音読にとまどうことがある。即ち彼ら自身の言語習慣に頼るから
 である。何故ならば 5.3. で述べたように個々の読み方が 1 つずつではないからで
 ある。例えば,

39) 服部四郎, 音韻論と正書法 p. 197

Kato を [keitou], Muroran を [mju:roræn] などのように, J/a を E/[ei], J/u を E/[ju:], J/a を E/[æ] 等のように彼らは発音してしまう。このような音声的相異を起させないためには一体どうすればよいのだろうか。J の a, i, u, e, o は /ア, イ, ウ, エ, オ/ という音に徹底させるべきか, 或は全く異なった symbols を用いるべきかは検討すべきである。

5.5. さて次は consonants の問題点を考察してみよう。consonants も vowel と同様。J E が対応しない音がある。即ち J にあって E にない音, E にあって J にない音があるのである。しかるに, これらの点も J にない音は E 音に近い J 音を探し, それを代用しているのが現状である。第2次的伝達である written language だけなら問題はなかろうが, それが音声になった時, 正しい訓練が出来ていなければ互いに communication をもつのが困難となるのは当然と考えられる。下の図は, 英語の欄は E にあって J にないもの, 日本語の欄は J にあって E にないものを示す。

英 語	日 本 語
f, v, θ, ð, r, l, s	c, θ, N, ⁴⁰⁾ r

5.6. これら J にない E/f, v, θ, ð, r, l/ それらに最も近いと思われる J 音に置換して対応させることが, 果してよいことなのかどうかは検討されるべき点である。

シーズン, ボタン, ステッキ, ケーキ, ラジオ等の単語は, 我々日本人同志では実に聞き慣れた, しかも使い慣れたものであるに違いない。我々日本人同志では問題を感じることはないであろうが, いざ英米人と話す段階になると厚い壁にぶつかる。それは使いなれた日本語化した発音のためなかなか,

[si:zn], [batn], [stik], [keik], [reidiou]

等の正確な発音が出来ないのである。外来語がこのように氾濫している日本に於ては真の英語教育はそう容易なことではないように思われる。

40) 今までのローマ字ではラ行に /r/ を使っていたが, アメリカ人のクラスで日本語を教授する際, /r/ をラ行の consonant に示すと, 彼独特の /r/ 音 (日本人には最も難しいとされている) で発音してしまい。所詮外国人なまりの日本語になってしまう例が非常に多かったので, 今迄使用していた /r/ のラ行使用を廃止し, /r/ を使用してみることにした。

5.6. しかるに、ローマ字綴りの再考が当然必要となってくる。明治、大正を通じて、ヘボン式に改良を加えた標準式と田中館式に改良を加えた日本式が、音韻論的しかも言語学的な見地で対立があったのは当然なことである。Romazination は「文字のための Romazination」ではなく、「音のための Romazination」でなければならない。即ち正しく発音されるための外国人のための発音文字記号とでもいうべきものでなければならない。

5.7. 以上展開してきたように日英両語の相関関係を見極め、比較研究していくことは、英語を知るだけでなく、日本語をも深く知り、かつ、探究できるようになるのである。更にこれら音声的相関関係の比較研究が深く繰り広げられることにより実用的な面、すなわち教育の場で納得ある正しい指導ができるようになると確信することを付記しておきたい。

List of References

- Bloomfield, Leonard. Language, London : George Allen & Unwin Ltd., 1935.
 Fries, Charles C. Linguistics and Reading. Holt, Rinehart and Winston, Inc. 1962.
 ———, Teaching and Learning English as a Foreign Language. Ann Arbor : The University of Michigan Press. 1964.
 Gleason, H. A. Jr. An Introduction to Descriptive Linguistics, Holt, Richard and Winston, 1967.
 Halliday, M. A. K., McIntosh, Angus and Stevens, Peter. The Linguistics and Language Teaching, London : Longmans, 1964.
 Jordan, Eleanor Harp. Beginning Japanese Part 1 and 2, New Haven and London : Yale University Press. 1963.
 Lado, Robert. Linguistics Across Cultures, Michigan : Michigan Press, 1957.
 Pike, Kenneth L. Phonemics, Ann Arbor : The University of Michigan Press, 1966.
 Roberts, Paul. Patterns of English, Harcourt, Brace & World, INC. 1959.
 Wise, Claude Merton. Applied Phonetics. New Jersey : Prentice Hall, INC. 1957.
 Young, John & Nakajima, Kimiko. Learn Japanese : Pattern Approach Vol. 1. Honolulu : East West Center Press, 1964.
 Rivers, Wilga M., 外国語教育と心理学, 紀伊国屋書店, 1967 (五十嵐二郎氏訳)
 太田 朗 現代英語教育講座 7, 研究社, 1965
 米語音素論, 研究社, 1960
 服部四郎 音韻論と正書法, 研究社, 1951
 言語学の方法, 研究社, 1960
 国広哲弥 構造的意味論 三省堂, 1967

英語教育シリーズ（別冊）大修館，1963

榎垣 実 日本外来語の研究，研究社，1963

小栗敬三 英語音声学，篠崎書林，1968

英語音声学概論，篠崎書林，1962